海外学界ニュース

モンゴル・ソ連の佛教事情

坂東性純

今年（一九七〇年）の六月十一日から三日間、蒙古（モンゴル）人民共和国の首都ウラン・バートルでアジア佛教徒会議が開かれた。参加国はモンゴル、ソ連、日本、南・北ヴェトナム、ネパール、インド、セイロン、マレーシア、シンガポールの十ケ国で五十名程が参加した。これまでソ連のシベリア地区及び曾ての外蒙に当るモンゴルにおける佛教の現況は、世界の他の諸国の佛教事情に比べて余りよく知られていないようである。筆者もつい最近、すなわち今年の三月にレニングラード、モスクワを訪れて以来、これらの地区の佛教に多少の関心をもちかけていたところ、思いがけず五月半ばにこの会議への招待状を受けた。この際実地にこの辺りの佛教事情の片鱗なりとも見聞することができたならば幸わせと思い出かけることにした。日本からは筆者の他に日本佛教鑽仰会理事長の中山理々師が参加され、この二人が日本を代表する恰好となった。この会議の主題はヴェトナム問題であり、アジアの佛教徒はヴェトナムにおける紛争の解決、及びひろくアジアの平和のために何をなしうるかという問題を討議することが目的であった。会議の詳細については、すでに中山師が「佛教タイムス」紙上（八五四号―八六三号）に記しておられるので、ここでは筆者の六月九日から二十三日までのほぼ二週間にわたるモンゴル及びソ連ブリアート自治区への旅行の寸感を、歴史を回顧しつつ記したいと思う。

モンゴル人民共和国に入るには、まだわが国との国交関係が正式に開かれていない現在、一旦モスクワかニューデリーに行き、そこにあるモンゴル領事館で入国査証を申請しなければならない。そこで筆者はモスクワ経由と決め、東京のソ連大使館領事部に先づ入国の申請をしたが、ここで思いがけず、二等書記官のコマロフスキー George E. Komarovsky 氏の親切な助力を得たお蔭で、出発に間に合うことができた。コマロフスキー氏は日本の佛教についても造詣の深い方で『円空の五千の佛』(Пять Тысяч Будд Энку, Москва 1968)という著書もあり、又『国際宗教ニューズ』(Vol. 9, No. 6, 1968)にも「ソ連における宗教と良心の自由」と題し、論文を発表されたこともある方である。かくて六月九日にアエロフロートのパリ行きの国際便で、昼すぎ羽田を発ち、シベリア上空をノンストップで十時間飛んだ挙句、同日夕方モスクワに着いた。この三月十四日に、ニューデリーに向けてここを飛び立った時は粉雪が降りしきっていたが、今度は街路樹の緑で覆われた市街地一面に、綿のような花粉が舞っており、クレムリン宮の庭などには薄紫のライラック、白のカリンカの花が咲き乱れ、打って変って明るい首都であった。モスクワのモンゴル大使館領事部では即座にヴィザを下してくれたが、ここで初めて知ったことは、ソ連

政府内における宗務会議 Council of Religious Affairs なるものの存在である。これは一つには信者が宗教的要求を充足する自由を保証し、二つには宗教団体の活動が宗教的な枠から外れないことを監督するという一九一八年に布告された政教分離及び教育と宗教の分離を定めた法律に基いて機能を果している政府機関である。モスクワでは宗務会議のコドゥコフ M. Kodukov 氏が主に各国の佛教代表の世話をされた。モスクワ空港でW・F・B・本部からオブザーヴァーとして派遣されたジョン・ブロフェルト John Blofeld 氏や、シンガポールのピット・チン・フィ Pitt Chin Hui 女史ほか、セイロン、インド、ネパールの代表と合流し、十日の夜行便アエロフロート国内機で東へ飛び立った。途中オムスクの空港で小憩、イルクーツク空港でモンゴル国営の飛行機に乗り替え、バイカル湖を超え、十一日の昼すぎ、初めてモンゴル人民共和国の首都・ウラン・バートル Ulan-Bator（モンゴル式綴りによると Ulaan-Baatar、「赤い英雄」の意）空港に降り立った。出迎えのモンゴル僧の中には、すでに到着していたネパールのアムリタナンダ Amritananda 長老の姿も見えた。待合室で一寸した歓迎のセレモニーがあった後、日本代表団付きの日本語通訳として、ドヨディン・アルマース Doyodyn Almaas 氏に紹介された。氏は四十二才、北京大学で日本語を学んだといわれるだけに、かなり達者な日本語を話し、モンゴル平和友好諸団体連盟執行委員会事務局長という長い肩書の持主である。以後ずっとアルマース氏が随行してくれた。

会議はこの到着日の午後の開会式を皮切りに予定通り三日間行われた。中山師は二日目の昼に遅れて到着された。会場は市の中央部スフバートル広場に面した国立中央オペラ劇場の東側にあるウラン・バートル・ホテルで、全代表の宿舎もここであった。会議はこのホテルの五階の会議場で行われ、議長は主としてこの会議の主催者であるガンダンテクチェンリン Gangdantekchenling 寺の管長であり、全モンゴル佛教会の長であるカムポ・ラマ・ゴムボヂャフ Khampo Lama Samagyn Gombojav 師がなり、適宜他の人びとと交替した。会場の同時通訳設備は完備し、英語・モンゴル語・ロシヤ語が主として用いられた。レシーヴァーは日本製であった。各国代表のスピーチはアメリカのヴェトナム介入に対する非難が基調であるかのように思えたが、中でもカムボヂャ人の長老比丘ダルマワラ師の、非難さるべきは現アメリカ政府の政策であって、アメリカ人民ではないという趣旨の真摯な演説が特に印象的であった。南・北ヴェトナムの代表までが、師の演説が終った時に起った万雷の拍手に和していた事実は忘れ難い。ウラン・バートル滞在中、二日目の昼到着された中山師と、市の郊外十キロ程北にある日本人墓地に参詣する機会を与えられた。又、二人で市の西北部のダルカ Dalkha 丘の中腹に位するガンダン寺にゴムボヂャフ師を訪い、師から八十人以上は優に収容できる賓客用の包（パオ）(蒙古語 ger、ロシヤ語 yurt)において丁寧なもてなしを受けた。

現在のガンダン寺は一八三八年の創立で、当初から五ケ寺からなる学問寺として発足し、蒙古最大の佛教センターである。

現在の本堂は一九五六年、佛紀二千五百年に建立されたとのこと。現在百十名のラマ僧が居るが、いづれも、四十才以上で青年僧は殆んどいないようである。一九一一年頃は蒙古全体で六百以上の大寺廟があり、そのうちウラン・バートルには十の寺院、三十二僧区あったという。また一九二〇年代には蒙古全体で二千六百以上の僧院があったと伝えられている。下って一九五八年の統計によると蒙古全人口九十三万六千九百人のうち、寺は五ケ寺、僧は二百人で、そのうち八十人はガンダン寺の僧であったというから、過去十年余りの間に僅かながら増えている勘定になる。また市民のガンダン寺への参詣者は一九五八年頃は、一週に六百人乃至七百人を数えたと言われるが、現在は不明である。ガンダン寺は初代から第八代にわたるボクド・ゲゲン(活佛)がおよそ二百五十年にわたって住い、全モンゴルに政教の全権を振った場所であるが、現在は一九三〇年代に行われた反ラマ闘争の影響によってか、モンゴル全土で殆んど唯一の寺として機能している場所として生き残っているらしい。中山師と筆者が訪れた六月十六日は相憎くの雨で、境内には殆んど人影がなかった。案内してくれたのは身体の大きい副執事長のダンザン D. Danzan 師であった。この寺の執事長のダグヴァドルジェ S. Dagvadorje 師は血色のよい人で、中山師が二日目に着かれた時に飛行場迄一緒に出迎えに行って下さった。ガンダン寺の僧が皆年寄りばかりで、モンゴル佛教の将来を背負って立つ若いラマの養成は一体どうなっているのかと、飛行場で中山師の到着を待っている間、このダグヴァドルジェ師に質問したところ、意外な朗報を聞くことができた。同師によれば、この九月中にガンダン寺の境内に、信者の寄進により、六年制の佛教大学が創立される計画が進んでいるという。十八才以上の男子でラマの志願者を、モンゴル国内のみならず、ソ連領のブリヤート・モンゴル自治共和国に住んでいるブリヤート人をも招き、差当り三十余名を募集し、ラマ及び俗人が教師となって佛教々育を施こすという。教授される科目は佛教哲学、論理学、儀式作法(第二学年から)、蒙古人民共和国憲法、チベット語、梵語、英語、それにブリヤート人には蒙古語を、蒙古人にはロシヤ語を教えるとのこと。ここで興味深い事実は、ロシヤ語と並んで英語が重視されているということである。現代ソ連の学者で英語で論文を書く人たちが意外に多い事実を考え合わせると尚更興味深く思われる。

会合の時クミス Kumiss (馬乳酒) を飲むラマ僧を見かけたので、日本代表団付きとして部屋に奉仕に来ていたガンダン寺のラマの一人、ムンコー師にこのことを訊ねたら、ラマ僧にテグチンとテグメンの二種があることを話してくれた。テグチンの方が在家僧でテグメンの方が酒、女、肉を絶った出家僧であるという。ガンダン寺の管長ゴムボヂャフ師はテグチンで副管長のヂャミン・チョムバル師の方が却ってテグメンであるという。閉会パーティの行なわれた出来てから四、五年になるという市内の新しいレストラン「トゥヤ」(「暁」)で、パーティの始まる前のひと時、ガンダン寺のラマの一人と通訳のアルマース氏を介して立話をした。談たまたまこの二種のラマに及ぶや、

このラマは、モンゴルでは、テグメンの方を管長候補としてテグチンより重要視することはない。学徳兼備で万人の尊敬をかちえた人物であるならば、その何れをも問わぬ。これこそわが国のラマ教が大乗仏教たるゆえんである、と力説した。

モンゴルではほかに、ウラン・バートル西方のオルホン河の流域にあるカラコルム Kharakhorm にジョイジル・ラマ寺があるという。カラコルムはまたエルデニ・ズー Erdeni Zuu とも呼ばれ、かっての元朝の首都として三百五十年ほどの間栄え、蒙古佛教の中心地であったところである。かってはラマ僧千五百人を擁したといわれるこの首都は、元朝が明朝に滅ぼされるまで続いたが、一五八六年、カラコルムの廃墟の上にこの寺が建立されたという。しかし現在は国立博物館(喬伊進廟宇博物館)と化して、寺としての機能は失われているようである。会議の後、海外代表は二班に分れ、アルハンガイ Alkhangai とカラコルムにグループ旅行をしたが、筆者は前者に割当てられた為、エルデニズーを見学する機会を得ることができなかった。

アルハンガイは別名をツェツェルリグ Tsetserlig と言い、海抜千五百メートルの高地にあり、ウラン・バートルから西へ飛行機で一時間ほどの地点にある。昔はこの地をエルデネ・トゥルゴイと称したらしい。清朝の康熙帝によって一七〇六年に建てられ、一七二三年に八十九才で没した初代ウンドゥル・ゲゲン(活佛)が一時住したらしい。現在では両翼の建物は地方博物館になっており、正面の建物はひどくうらさびれた倉庫になっていた。境内には香炉が残り、有りし日の寺としての面影を留めている。二階建の両翼の床にはガラス張りのケースの中に動・植物、鉱石、地方の民芸品、武器等と並んでチベット語や梵語、蒙古語等の経典も陳列してあり、一部屋全体に革命の経過を示す写真などが革命の英雄チョイバルサン、スフバートル、レーニン等の肖像画と共に掲げられていた。ラマ僧は無論一人も見かけることができず、ふつうの博物館にいる番人風のモンゴル人が二、三人居たにすぎなかった。元朝の創立者チンギス・ハーンの宗教はシャーマニズムであったが、その孫にあたるフビライ・ハーンの宮廷の主要宗教は紅帽派ラマ教であった。十三世紀日本の懼れた元朝の宗教は、豈計らんや佛教(ラマ教)に他ならなかったわけである。その後十六世紀の末以後、清朝の政策により、黄帽派ラマ教が蒙古一帯に拡がり、強大な勢力を振うようになったという。一七一二年に一五〇人のラマ僧がチベットより招かれたという事実もあり、その後、二十世紀の初頭、社会主義革命の頃迄その権力を保ち続けたのである。一九二六年の政教分離、一九六〇年の社会主義憲法制定にいたって、漸く現在行われている宗教に対する国是が定まったと言えよう。モンゴル憲法の宗教に関する規定はその第八十六条に示されている。それによると、モンゴルでは憲法上、宗教は政治および教育から分離され、信仰、宗教の自由は保障されているが、同時に反宗教宣伝を行う自由も保障されているのである。

ウラン・バートルでの会議及び地方旅行を了えた海外代表一行は、ブリヤート・モンゴル地区にあるイヴォルガ僧院 Ivolginsky Monastery の長であり、同時にソ連全土の佛教徒を統

率する職にあるバンディード・カムポ・ラマ・ゴムボイェフ Bandido Khampo Lama Zhambal Dorzhi Gomboyev の招待に接し、六月十七日の昼すぎウラン・バートルを政府から提供されたモンゴル航空機で発ち、イルクーツクに一旦戻り、再びアエロフロート機でバイカル湖を超えて、その東側にあるブリヤート・モンゴル自治共和国の首都ウラン・ウデー Ulan-Ude（「赤い河」の意）に夕方到着した。一九六〇年の統計によれば、ウラン・バートルの人口は十六万四千人とあるので、今日ではざっと二十万人位と見ることができよう。ところが、このウダ河とセレンガ河の合流地点にあるウラン・ウデーを中心とするブリヤート・モンゴルの人口は凡そ三十万人と推定されている。これは内蒙（現在では中華人民共和国の中に含まれる）の蒙古人約百五十万人を含む全モンゴル人三百万人の約十分の一に当る。ウラン・ウデーに着くや、われわれを含む代表の一部は、市内のホテル・オドン ОДОН（「星」）に案内された。ここでも中山師とは同室の部屋を当てがわれた。ブロフェルト氏とヴェトナム代表の一部は別のホテルに行かれ、インド、セイロン、ネパールの比丘等はイヴォルガ僧院に泊ることになる。

翌日はウラン・ウデーから三十五キロ離れた郊外にあるイヴォルガ僧院に一行はバスで出かけた。途中昨日下りた飛行場の側を通ったが、それを右手に見て更にその二倍以上離れたところに僧院があった。午前中、ここのラマと南方の比丘による盛大な法会が営まれた。最初地元のラマ三十名程が、ゴムボイェフ師の導師でチベット語の読経をし、次いで南方比丘がパーリ語で読経した。初めて聞く様々な楽器による鳴物入りのチベット語の読経は、日本で行われている漢文の声明と響きがそっくりであった。ゴムボイェフ師の被っている細長い黄色の礼装用の帽子は、ここのラマ教が流れを汲んでいるところのチベットの「黄帽派（ゲリュクパ）」の象徴かと思われる。遠近の信者が堂の内外に溢れ、そのため境内に佇んで、堂の外で合掌して読経に耳を傾けている信者が多かった。持っている手珠数は南方佛教信者のと共通の百八の珠を有し、それを爪ぐりながら「オム・マニ・ペーメー・フーン」を唱える。儀式を終った僧達がヴェランダに出て祝福を授け始めるや、境内には延々長蛇の列ができた。お爺さんやお婆さんに手を引いて連れて来られた幼少の男女の子供達もいる。四、五人グループで列に並んでいる若いミニの娘さんらもいた。高校生ぐらいの若い人たちに出会ったのはよかったが、ロシヤ語が分らず、ドイツ語の片言で意志を通じ合う始末。素朴で敬虔な名もなき信者の群の中にいる時、ロシヤ人の中にいるという気が全くせず、日本の田舎の信心深い人達の中にいるという感じがした。人種的には幼時に尻の上を青く彩る蒙古斑を共通にもつ、同じモンゴール人種同志であるせいかも知れない。ここイヴォルガ僧院の境内は広く柵で周囲を仕切られ、木造の同じような造りのダザン dazan と呼ばれる僧の住居も、本堂の裏手に三十近くある。本堂は一九四六年に建てられて真新しく、塀をなす木の柵のすぐ内側にはオム・マニ・ペーメー・フーンをチベット語、蒙古語で記した祈禱法輪筒（プレイング・ウィール）が簡単な屋根をもつ東屋（あずまや）の中に収まり、一列に幾つも並び、幾

人かの信者がそれらを音もなく廻していた。ここの副管長はエルデニーエフ・ジィムバ Erdyneev Djmba 師であるが、一行はゴムボイェフ管長の住居で馬乳酒、菓子などの饗応を受け、ゆっくり山羊の肉を主とする昼食をご馳走になった。ゴムボイェフ師の住居の奥の間には各国の佛教徒から贈られた佛像・書物などが小博物館風に陳列してあった。境内にはセイロン佛教徒から贈られた菩提樹を育てている温室もあった。冬は摂氏の零下四十度以下の寒さになるという。ここの図書館にはカンヂュール百八巻、タンヂュール二二五巻等の他、チベット、蒙古、中国、インドから将来せられた貴重な経巻・書籍、ツォンカパ、タラナータの著作の他、第五世ダライ・ラマの二十一巻に上る著作等を収蔵していると言われる。

ブリヤート・モンゴルには、全ソ連の佛教を統べる中央本部にあたるこのイヴォルガ僧院の他に、ウラン・ウデー東方のチタ Chita 地区にアギンスク僧院 Aginskoye Monastery があるが、筆者の滞在中チタ迄足を伸ばすことはできなかった。アギンスク僧院は一八一〇年に建てられ、永いこと経典・書籍の木版印刷のセンターとして知られていたが、近代の印刷術の発達につれて、この特色も失われつつあるという。イヴォルガ僧院の現管長であるゴムボイェフ師も一九六三年に現職に選ばれる迄は、このアギンスク僧院の管長であった。これは恰度イギリスのヨークの僧正がカンタベリーの僧正に選ばれたのと同じ様な関係である。ブリヤート・モンゴル地区で最初に建てられた寺は Tsongol Dazan と言われ一七四一年に遡るが、現状は定かではない。何れにせよ現在ソヴィェト佛教徒の大部分は、バイカル湖の東から南へ及ぶ地域に住むブリヤート・モンゴルのラマ教徒に限られると言っても差支えないようである。

現在のソ連で佛教研究の拠点として、三つの場所が挙げられる。即ち、モスクワの科学アカデミー所属の東洋研究所、レニングラードにあるこの支所、およびウラン・ウデーにあるシベリア地区科学アカデミーの二つの研究所、即ち自然科学研究所と社会科学研究所のうちの後者である。ウラン・ウデーに滞在中、この社会科学研究所を訪ねることを申し出ていたのであったが、きちんと組まれた代表一行の日程のため、例外の行動は事実上許されず、ウラン・ウデーに居りながら、遂に訪れることができなかったのは返す返すも残念であった。しかし、帰途モスクワに立寄った時、たまたまウラン・ウデーから出張し、モスクワに滞在しておられた佛教学者クセニヤ・ゲラシモヴァ Kseniya Gerasimova 女史に、友人インナ・ムリアン Inna Murian Pheodorovna 女史（モスクワ美術研究所員）宅で紹介され、夕食を共にしながら三、四時間色々お話しを伺うことができたのは、せめてもの慰めであった。。ゲラシモヴァ女史によると、現在ウラン・ウデーで活躍している佛教学者は、女史の他に、所長のセミチョフ Bris Vladimirvich Semychov 氏、ダンダロン Bridya Dandaronovich Dandaron 氏であるという。前所長のルミヤンツェフ G. N. Rumyantsev 博士は一九六六年に死去され、現在はスチェルバトスコイの弟子である今年七十才になるセミチョフ氏がその後を継いでおられる由。セ

ミチョフ氏は一九〇〇年十一月七日生れ、健康には恵まれず肺患のための病苦を押して研究しておられるという。ダンダロン氏は一九一〇年の生れで今年六十才になるブリヤート人のチベット文献学者で、博士の翻訳出版された *The Source of the Sages* と題する佛教術語辞典の共同編者であるブバーエフ R. Pubayev 氏は四十二才になられるという。ゲラシモヴァ女史は当年五十一才、自らをロシヤ人、ブリヤート人、タタール人の雑種と称しておられるが、レニングラード大学東洋部卒で、歴史・美術・宗教が専門であると言われる。イルクーツクに生れ、すぐウラン・ウデーに移り住んだが、次いでレニングラード大学に入り一九五三年までそこで過し、今はウラン・ウデーに戻っているが、ウラン・ウデーが自分の故郷のようなものだと言われる。チベット語を習ったのは、レニングラードにおいてであるが、師匠はインドからレニングラードに来たインド学者サンクリチヤーヤナ Rāhula Sānkrtyāyana の妻となったロシヤ人の Helene Norbertovna Kozrovskaya 女史であるという。コズロフスカヤ女史はサンクリチヤーヤナの教え子で二人の間には一子があるという。また自分は佛教徒ですとはっきり言われる。母上がウラン・ウデーのラマ教博物館長をしていたインテリであった関係で佛教に関心を懐くようになったらしい。別れに際しては、アンジャリ Añjali（「合掌」）が自分の育ったブリヤート・モンゴル人の礼ですと言って合掌して去られた。モンゴルに行きがけに、モスクワに立寄った際、ボンガード・レヴィン Bongad-Levin 博士に、ナデジダ・ヴィノグラドーヴァ Vinogradova Nadejda Anatolievna 女史を通じて連絡したところ、折から、その翌日の六月十一日にイリン Iliyn というインド学者の博士号授与式の準備で忙がしい最中であることが分り、ボンガード・レヴィン博士とは此度は会わず仕舞であった。イリン博士にはマヌ法典の註釈やインド初期佛教史の学績があるらしい。此度の旅行では、ウラン・バートルで、モスクワ東洋研究所のディリコフ Sandje Dantsikovich Dylykov 博士と初めてお目にかかったが、生粋のブリヤート人で、五十七才の現代佛教に関心の深い学者とお見受けした。此度の旅行中、僅かながら得られたソ連佛教学に関する資料の中には、セイロン佛教史の学者・セメカ E. S. Semeka 女史の『セイロン佛教史』・*ИСТОРИЯ БУДДИЗМА НА ЦЕЙЛОНЕ* (МОСКВА 1969)、モスクワ科学アカデミー会員であり東洋学の元老コンラッド N. I. Konrad 博士の『七十五才頌寿記念論文集』*ИСТОРИКО-ФИЛОЛОГИЧЕСКИЕ ИССЛЕДОВАНИЯ* (МОСКВА 1967)『スチエルバトスコイ生誕百年記念論文集』*МАТЕРИАЛЫ ПО ИСТОРИИ И ФИЛОЛОГИИ ЦЕНТРАЛЬНОЙ АЗИИ* (УЛАН-УДЭ 1968)、及び『リョーリヒ著作集』*ИЗБРАННЫЕ ТРУДЫ Ю.Н. РЕРИХ* (МОСКВА 1967) 等がある。尚、この小文を草しつつある折しも、ニコライ・ヨシフォヴィッチ・コンラド博士の訃報が新聞に伝えられた。それによると、肩書は、ソ連科学アカデミー会員、日本語研究家、九月三十日夜死去、七十九才。ソヴィエト東方学の基礎を作った功労者の一人、日本と

中国の歴史、言語学、文学に関する数多くの研究を進めてきた。同博士監修による『和露辞典』（全二巻）が今年ソ連で出版された。一九六九年三月、日本政府から勲二等旭日重光章を授けられた、とある。ここに謹んで哀悼の意を表する次第である。序でながら上に挙げた同博士の記念論文集において、佛教に関係のあると思われるものは、A・M・ピアティゴルスキー氏の「佛教哲学における人間類型の表徴」A. M. Пятигорский: знак типа личности в буддийской философии 及びE・B・ザバドスカヤ女史の「サリンジャーは禅に何を求めているか」E. B. Завадская: Что Сэлинджер ищет в《Дзэн》?の二編である。

現在のモンゴル・ソ連における佛教は、実践的信仰としてはほぼブリヤート・モンゴル系の人びとの間にのみ保持されていると見て差支えないように思われる。又、学問的研究の側面では、何らかの意味で、殊に血縁関係などから見てブリヤート・モンゴル人種に縁の深いロシヤ人がそれに携わっているようである。ディリコフ博士、その令嬢ヴィレーナさん、ダンダロン氏、ゲラシモヴァ女史、またその膝下で佛教研究を始めたという新進の研究員ヴァンチコヴァ Tsymzit Vanchikova 女史などはそのよき例である。殊にヴゥンチコヴァ女史は、ウラン・バートル、ウラン・ウデー、イルクーツク、モスクワ等に跨がる海外代表一行の旅行中、通訳として活躍された若手の一人であったが、考古学、歴史学、文献学的研究に偏していた従来のソ連佛教学に慊らず、今後はもっと思想的研究を深めたいと語り、筆者にコンゼ博士の『佛教』、鈴木大拙博士の『大乗佛教概論』を是非送ってほしいと希望していた。これは父上バルダンジャポフ Baldanjapov 氏がブリヤートの著名な佛教史学者であると言われることと相俟って、ウラン・ウデーの佛教研究に適した精神的風土にもよることであろう。ともあれ、ブリヤート人の若い世代の間でヴァンチコヴァ女史ごときの存在を見出すことができて、ブリヤート・モンゴル佛教の将来に少なからぬ期待と希望をもちうるかに感じたことである。

この小文を締め括るに当り、最近目にとまったモンゴル・ソ連の佛教界、佛教学界の事情を伝える書物、論文の中、主なものを左に記しておきたい。今後この方面に関心を持たれる方々のご参考になれば幸甚である。

〔論　文〕

○佐藤任「ソヴィエトにおける東洋学の現況」（「密教文化」第五二号、一九六一）

○Holmes Welch "An Interview with the Hambo Lama" (*Royal Central Asian Journal*, Vol. LVI, April, 1962)

○金岡秀友「ソヴィエト佛教学の現況」（「国際宗教ニューズ」第五巻・第三号、一九六四）

○金岡秀友「チベット・モンゴルの佛教——共産主義とのでアい——」（「国際宗教ニューズ」第六巻・第二号、一九六五）

○水谷幸正「ソ連の佛教学」（「在家佛教」第十六巻、第百九十号、一九六八）

○水谷幸正「ソビエト（ロシア）における佛教研究」（「国際

宗教ニューズ」第九巻・第六号、一九六八)
○G・コマロフスキー「ソ連における宗教と良心の自由」(右に同じ)
○森祖道「ソ連の佛教学の現況——隣接諸学との関連において——」(『国際宗教ニューズ』第十巻・第四号、一九六九)
○Ven. N. Jinaratana Maha Nayaka Thera "My Visit to U. S. S. R. & Mongolia" (*The Maha Bodhi*, Vol. 77, Nov.-Dec., 1969)

〔書　籍〕

○Nikolai Yermoshkin "Buddhism and Buddhists in the USSR" (Novosti Press Agency Publishing House, Moscow, 1960)
○Alexéi Pousine "La Religion en URSS" (Editions de l'Agence de Press Novosti, 1962)
○『モンゴルのラマ教』(外務省アジア局中国課、一九六三)
○オーウエン・ラテイモア『モンゴル——遊牧民と人民委員——』(岩波書店、一九六六)
○ワルター・ハイシッヒ『モンゴルの歴史と文化』(岩波書店、一九六七)

〔附記〕

去る十月十六日から二十一日まで、京都国際会議場において世界宗教平和会議が行われた。その際モンゴルからダグヴァドルジェ師、ジュグデル Ch. Jugder 教授、ドルジゴトフ Dorgigotov 氏の三人、ソ連からディリコフ博士、バト・ツィディポフ Bato Tsydypov 氏の二人が来日した。ことにドルジゴトフ氏とツィディポフ氏は、ウラン・バートルでのアジヤ佛教徒会議の際、通訳として活躍されていた。筆者はこれら五人の人びとに再会した時、会議後のウラン・バートルにおける佛教界の消息を聞く機会を得た。その時得た情報によれば、ガンダン寺にこの十月二十八日、予定通り佛教大学が設立され、盛大な式典が催されたという。ディリコフ博士も参列の栄を得られたとの事。入学した学生は、このたびは蒙古人のみで三十名程であるとの事。イヴォルガ僧院のハムボ・ラマは、ソ聯地区から近き将来学生をここへ送るべく考慮中であるとのこと。尚、ネパールのアムリタナンダ長老からの来信によれば、ガンダン寺のダンザン師を長とする一行五名がアジア佛教徒会議の後カトマンズに巡礼に来り、一週間滞在したという。ダンザン師らは、会議のあと、二十名の若い人びとがガンダン寺で得度を受けたというニュースを齎した由。モンゴル政府が反対を表明しなかったのは、このたびの得度式が近来初めてであるという。